

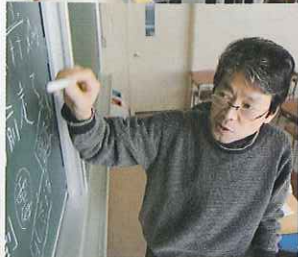
モットーは「もつともつと」向上心を忘れずに

先生

登場

人見

豊先生



PROFILE

MINORU HITOMI

京都府出身。バンド、ザ・タイガースにてドラム担当のちに慶應義塾大学、中国文学修了。

「言葉は生きていると思うので、常にその国の文化を学んでいかないと。教師として知らないことを開きなおることは、よくないと思いますから。だから、エンドレスなんです」

と人見先生。

全国の高校で中国語履修者数が一番多いのは我が塾高。人見先生の授業を受け、大学でも中国文学を専攻する生徒も多い。数年前には、上海空港でふいに「人見先生」と誰かに声をかけられたら、塾高の卒業生で驚いたそう。その生徒は、ビジネスで中国に訪れていて偶然の再会だったとか。

「一番最初の教え子たちが、いまでは中国関連の企業や新聞社などで、ビジネスで中国語を利用して

塾高で中国語教諭として教鞭を執る人見豊先生は、その昔、一世を風靡した超人気バンド、ザ・タイガースの元ドラマーだ。

「バンドを一生続ける気になれなかったので、慶應義塾大学で中国文学科を専攻しました」と笑う。

華やかな音楽業界を抜け、なぜ中国文学へ惹かれたのか質問してみたところ「最初は、日本文学を学びたいと思い、ならばそこに大きな影響を及ぼした中国文学を知ろうと思ったことがきっかけです」

第一線で活躍していたりする姿を見ると、ささやかながら社会に貢献できたのかなと嬉しく感じます」と人見先生。

塾高では、毎年、大学卒業レベルの難度の中国語検定3級に50名ちかい生徒が合格する。

「慶應は総合大学ですが塾高で中国語を学んだ学生たちは卒業時に、東京外語大学のような語学専門学校の生徒と同レベルに。しかも他の専門分野も持っている。だからひとりでも多くの生徒が中国語を彼らの手段のひとつとして、自身が目指すものを表現する時に役立つてくれたら、嬉しいですよ」と語る。

人見先生は、プライベートでも頻繁に中国に遊びにでかけているという。

「一年に数回は中国を訪れていますが。言葉は生きていますから。もうなくなってしまうような中国語を生徒に教えてもしょうがないでしょう」と人見先生。

今日よりも明日は明るい。鄧小平の時代から改革開港へ一気に国が動きだし、現在の中国には経済成長の頃の日本のような活気がある。その国の言語を通じて、生徒たちも常に前を向く気持ちを持たずにはいてほしいと願い、今日も人見先生は教壇に上がるのだから。